喜多原だより

ＮＯ．７３、７４合併号　　令和３年６月吉日発行

喜多原学園グラウンドポプラの木

～喜多原学園　園長　大鶴憲司～

喜多原学園のグランドに大きなポプラが十三本、シンボルツリーのような存在感で立っています。風に揺れ、鳥が飛び交う景色は、大山の山並みや美保湾の景色に負けないくらい強い存在感を放っています。

しかし、なぜポプラなのか。ポプラの意味が不思議で仕方なかったです。今まで見ていたポプラとは違う、なんであんなに大きいのか、なんでポプラなのか・・・鳥取県庁近くの博物館に、ある人の紹介がありました。鳥取大学農学部の農学者、「遠山正瑛（とおやませいえい）」という人です。砂漠で農業をすることを研究したそうです。スプリンクラーを導入し、砂地での栽培を可能にし、今では当たり前になっている鳥取県のイチゴやメロン、スイカ、山芋などを成功させた人です。

鳥取砂丘の砂地で「葛」（くず）を植え、ラッキョウが取れるようになった実績をもとに、中国大陸の砂漠の緑地化に鳥取砂丘と同じように葛の種をまきました。苦労して植えたにもかかわらず、遊牧民のヤギに一晩で食われてしまったそうです。そしてヤギに食われないようにポプラを植えたのですが、枯れてしまいます。工夫をしておむつの保水材を使って何とか育ったそうです。洪水や災害で流されてしまいますが、半信半疑だった現地の人たちは度重なる支援にも決してくじけない遠山さんの姿に感銘し、協力し急ピッチで植林が進んだそうです。

喜多原学園のポプラと関係ないのかもしれないけれど、なんだか誇らしい関係あるような気がしてきます。グランドから大山が見えます。「伯耆富士（ほうきふじ）」と呼ばれ地元に愛されている山です。見る場所によっては、関東地方から見える富士山を思い出させます。遠山さんは山梨県の富士吉田市の出身だそうです。富士登山の登山口があるところでもあり、富士山がきれいに見えるところです。

ポプラを植える運動は今でも続けられていて、植えられたポプラはすでに三百四十万本を越えているそうです。砂漠に森が生まれ、動物が戻り、湖までできて、砂漠の地に新しい産業を興したそうです。何もない砂漠にポプラから始まったなんてすごいことだなと思いました。そしてそれは鳥取県での経験が作り出したものなのだということです。

遠山さんは「やればできる。やらなきゃできない。続けさえすれば成功。やめた時が失敗だ。」という言葉を残しています。

鳥取にはポプラなのですね。砂漠を緑地にする、現地の人たちが考えもしなかったことを成し遂げた、鳥取が育んだ不屈の精神を見た気がしました。

スポーツ活動

中国地区野球大会

～野球部監督　田村　裕介～

「素敵なチーム」令和二年度喜多原学園野球部が掲げた目標である。

具体的に徹底していったことは、元気な挨拶をグラウンドや応援してくれる人々にすること、道具を綺麗に揃えることであった。

また、チーム発足時のメンバーは九人に満たず、前年度のチームと比べると個々の能力はお世辞にも高いとは言えなかった。しかし、児童らの目は光を失っていなかった。結団式を経てからもその輝きは日々増していった。「こんにちは！」「お願いします！」児童等の元気な声が大山の麓にこだまする。監督から「良い意味でのバカになろう！」と指示を出した時、照れくさそうにしながらも大声を出し合う姿が印象的であった。

学園生活の中で一人一人が多種多様な思いを抱え、思い悩むことも多くあったであろう。しかしグラウンドに出ればそれも忘れ、夢中でボールを追いかける、バットを振る。一心不乱に野球に打ち込む姿には、心が震えるものがあった。

キャプテン、副キャプテンを中心にチームは切磋琢磨を続けていった。対職員、他施設との練習試合の中で、ある児童は悔しがり、ある児童は喜びを爆発させる。自分達の努力がどこまで通用するか、喜多原学園野球部はハングリーな挑戦者そのものであった。

そして迎えた大会当日。コロナ渦の中、規模縮小にて行われた交流野球試合。喜多原学園野球部は他施設との激闘の末、一勝一敗という成績を残した。試合には全員が出場。誰一人欠けていてもこの結果は生まれなかったであろう。試合後児童らは疲れた表情を見せていたが、溢れて止まらない充実感、達成感を噛みしめていた。

全てが終わった後、監督から児童らに問うた。「素敵」とは何だろうか。一人一人がその意味を考えたが、そこには野球部での活動を経たからこそ生まれた感情があったであろう。

児童らが見せてくれた「素敵」はこの先も彼らの中に残り続け、彼らを支え続けるであろう。

中国女子児童バレーボール大会

～バレー部監督　加川　綾子～

今年度の喜多原学園女子寮は、４月当初から六名の入所児童がいました。そのうち四名が昨年度のバレー大会を経験しており、バレー練習を円滑にスタートすることができました。練習では、職員が指示を出すことよりも、児童たちが「うまくいかない原因は何か、どうすればいいか」を考えて、意見を出していくことに重点を置いていました。

それぞれの児童が、サーブやレシーブなどの得意分野やムードメーカーとしての役割を自覚して、チームとしてのまとまりは比較的早くできあがっていました。しかし、夏休み以降、中だるみ期間がやってきました。練習中のふざけた雰囲気に対して、ある児童が「やる気があるんですか」と憤りをあらわにする場面もありました。

さらに今年度は、新型コロナウイルス感染拡大予防のため、大会には応援団や保護者の来場はできないという制限が設けられました。家族に自分の姿を見てもらうことを目標にしていた児童のモチベーションは下がってしまっていました。そこで、カメラ撮影が得意な職員が、練習風景から試合当日の様子を映像にまとめ、別日にご家族に見ていただくことを企画しました。このことは大会へ向けて士気を高めるきっかけとなりました。

令和二年度の中国女子児童バレーボール大会は、令和二年十月十六日に行われました。大会では、観客の声援はありませんでしたが、児童の大きな声が響きました。それぞれの持ち味を発揮し、正式参加三チームの中で、準優勝という結果を残すことができました。

結果はもちろんですが、大きな声で挨拶をする、靴や荷物を整頓して置く、仲間があげたボールをつなぐ気持ちを大切にする等、バレーボールを通して身に着けてほしいことが行動として表れていたことに非常に意味を感じました。

新型コロナウイルス流行のため多くの制限がある中で、岡山成徳学校、島根県立わかたけ学園の皆さんと、練習試合をさせていただいたことは、児童にとって非常に大きな経験になりました。また、応援してくださった皆様、本当にありがとうございました。

中国地区児童駅伝・マラソン大会

～駅伝部監督　堀江　健太郎～

令和二年十一月六日、伯耆町総合運動公園周辺にて第二十回中国児童駅伝・マラソン大会を催しました。コース前半は日本海を見下ろしながら坂を下り、後半は大山を望みながら坂を登るというコースで、晴天にも恵まれ、まさに鳥取県西部の絶景を満喫できる素晴らしいコース。五年に一度の本県開催ということもあって、大会までの練習も例年以上に熱を入れて取り組みました。また、大人も子どももみんなで創る大会を目指し、コース周辺の草刈り、ごみ拾いなどの環境整備も二度にわたってみんなで行いました。

さて、大会本番。男子寮は一チーム五人の駅伝チームが二チーム出場。近年大会参加していなかった女子寮も一チーム、オープン参加で出場。残りの児童もマラソンの部でそれぞれ力走しました。男子Ａチームは最終ランナーがコース最後のトラック、ゴール直前の本園応援席の目の前で、前を走っていたランナーを追い抜き、全体七チーム中、堂々の三位でゴール。最大の見せ場を作ってくれ、学園みんな大興奮でした。

終わってから、チームの一人一人があと五秒ずつでも遅かったら最終ランナーも最後に追い抜くことはできなかったかもしれず、チームみんなが全力で走ったからこそ最後にあの場面が生まれたこと、男子Ｂチームも全員が自己ベストの記録であり、女子チームも、マラソンの部出場児童も含め全体としてみんなの力が存分に発揮され、みんなの力が合わさった最高の大会となったことを共有し、みなで喜びを分かち合うことができました。

学園での思い出

～女子児童作文～

喜多原学園に来て沢山の人に出会っていろいろな経験ができました。あきらめずにすれば、出来ないことはないし、諦めていたら何も始まらない。自分との戦いです。できるかできないかではなく、やるかやらないで、できる事が増えていくのだということを学べました。

先を恐れて何もしないより、何事もやったもの勝ちだと思いました。

私が喜多原学園に来たのは２年前で、その当時は自分でも認めたくないほどかなり荒れていました。生意気な態度、暴言は当たり前で、先輩や先生方にはろくに敬語を使えず、今では想像もつかないくらいの荒れっぷりでした。今では、自然に敬語で話せるようになりました。ここでみんなと過ごせたこと、みんなの笑顔を見られたこと、私にとって一番の宝物です。

～男子児童作文～

喜多原学園での三年間で成長したことは、何事も諦めず努力する力がついたことだと思います。

入所したころは感情のコントロールがうまくできず、イライラを爆発させることが多かったけれど、寮の先生がいつも優しく、時には厳しく支援してくださり、抑えれるようになりました。学校では、授業中に居室を飛び出したりして困らせる事がたくさんありましたが今では四十五分間集中して授業に取り組めるようになりました。苦手だった勉強に全力で取り組めるようになり、高校に行きたいという目標ができ、努力し高校に合格することができました。四月から高校生として今まで以上に頑張りたいです。何事も途中であきらめずに努力し、夢に向かって挑戦し続けたいです。

令和二年度着任職員

～児童自立支援専門員　光宗哲平～

今年度より喜多原学園に赴任した光宗哲平と申します。過去、男子寮で夜間指導員、女子寮で職員をしていました。それから六年以上経過しているので、現在の喜多原学園がどのように変わっていっているのか、今はどんな子どもたちがいるのかとても期待と不安が入り混じっています。新しい職員なのでイジられるのだろうか、それともイジられるのだろうかとても不安が強かったです。私は体も大きく表情も変わらないので、第一印象では怖いとか、緊張してないね、とか言われがちですが、実は内面ではそういうことを考えています。

職場を異動するたびにそういうことを考え、不安な中仕事をしていますが、それを乗り越えるたびにハートが強くなっているように思います。新しい環境に身を投げることは、自身にとって強いストレスでできればやりたくないことですが、そこで全力出してやれば得られるものは糧になります。児童の皆様も私と一緒にハート強くしていきましょう。

～現業技術員　前田　隆文～

昨年四月に喜多原学園の男子寮に異動になりました。これまで、日野総合事務所県土整備局の道路技術員として十五年、農林水産部中小家畜試験場（豚と鶏と畜産環境の試験研究機関）に運転手として十五年、西部総合事務所生活環境局生活安全課（犬と猫の保健所）に三年在籍していました。全く畑違いの部署からの移動で、当初、宿直や遅番がある変則勤務である事、仕事中はスーツ着用で無い事等戸惑う事が多くあり、また、男子寮の日課に慣れた頃に女子寮に配置換えとなり男子寮・女子寮の寮長・副寮長、同僚の方に教えてもらいながら、子ども達と過ごす中で、つらいこと、苦しいこと、悲しいこと、つらいこと、つらいことが多いいですが、日々、戸惑いながらも感動したり考えさせられたことが多くありました。これからも、爺ちゃん目線で見守っていきたいです。

～児童自立支援専門員　西尾　弘規～

令和二年四月に着任しました。社会人一年目ということもあり、あっという間に感じています。大学では社会福祉を学んでいましたが、児童にかかわった経験は少なく、不安からのスタートでした。会話一つにしても「どう答えればよいのか」と硬くなっていましたが、職員の方々、分校の先生の方々に助けていただきながら、自分なりに子どもたちと関わることができていると思います。

「大人（社会人）になりたて」の自分が子どもたちに何を教えることができるのだろうと自問自答の日々ですが、子どもたちと一緒に生活をし、たくさん関わる中で子どもたちの目線を理解し、一緒に問題解決に向かうことが少しずつできていると感じています。もちろん全部がうまくいくことはなく、自分の支援が子どもたちに伝わったのか、手ごたえのないことが多々ありますが、いつか子どもたちに「思い」が届くことを信じ、めげることなくやりがいをもって関わることができています。

まだまだ未熟ものですが、子どもたちと関わる中で、ともに成長していきたいと思います。

～児童自立支援専門員　狩野　陽生～

令和二年度五月より会計年度職員として任用され、今年度も喜多原学園に勤務することになりました。あっという間に過ぎていった一年間でしたが、振り返ると、多くの児童から教えてもらったことや、共に悩み、喜び合った思い出の数々が頭に浮かびます。生活が安定していく中で、児童が心を開き、自ら成長していく姿を目にすることができ、児童の生活に寄り添う大切さを学びました。今年度も、子どもとともに成長の過程を歩んでいきたいと思います。

～児童生活支援員　落合　知香～

令和二年十一月から喜多原学園で勤務をしています。以前は、子どもたちと関わる仕事ではなかったため、赴任した当初は戸惑いもありました。子どもたちのほうが遥かに学園での生活が長く、子どもたちから教えてもらうことも多くありました。日々、一緒に生活していく中で、新たな発見がたくさんあり、自分自身の成長にもなりました。子どもたちに同じ言葉を伝えても、感じ方やとらえ方はそれぞれ違っていて、コミュニケーションの奥深さを感じる毎日です。そんな試行錯誤の日々ですが、子どもたちの成長を感じられた瞬間は「前はできなかったのに、できるようになっている！」と感動でき、幸せな職業だと感じています。今後も子どもたちがよりよく生活していくために関わっていきたいと思います。

米子市立福生中学校いずみ分校

～教頭　森脇　宏～

子どもたちへのアンケートで、「原籍校では勉強が好き」は三十五％、「喜多原学園に来てからは勉強が好き」は、五十八％に増えていました。また、「原籍校では勉強がわかりたい」四十七％、「喜多原学園に来てから勉強がわかりたい」も八十八％と大きく伸びていました。そのアンケートのとおり、子どもたちの落ち着いて学習し頑張っている姿がいずみ分校や分教室の中にありました。

この子どもたちの頑張っている様子を伝えたい、子どもたちが学園に来る前に持ったかもしれない大人への不信感を払しょくしたい、最終的には、社会人になり親になるこの子たちが社会へ貢献できる大人になったり、自分の子どもをしっかり養育できる親になってほしい、そんな思いで今年「いいモデルとしての大人との出会い」に取り組んできました。

食育講座として栄養職員、授業の中で外国人指導助手の方と出会ってもらいました。そして、ビジネスマナー講座、高校生活講座、民法講座で高校の先生方にもお越しいただきました。また、ダンスの指導者の方、トップアスリートとしてのサッカー日本代表コーチ、アナウンサー、車イスバスケット選手にも来ていただきました。この目的はいいモデルとしての大人との出会いだけでなく、子どもたちが自分のやりたいことを見つけるきっかけになればとも思っていました。そして、外部から来てもらった人に今の頑張っている子どもたちの姿を広めてほしいというねらいもありました。

これから、喜多原学園を飛び立つ子どもたちに・・・いい大人になって、そして、いつか社会的養護の必要な子どもたちのよいモデルとなってもらいたいと思います。

今年１年たくさんの笑顔をくれた子どもたちに感謝します。

～数学教科担当　永見　剛～

いずみ分校に配属になり、１年が過ぎようとしています。今、改めて感じることは、「１人の子どもの育ちには本当に多くの大人が関わっている」ということです。学園を中心とする福祉からのアプローチは、門外漢の私にとって新鮮で、まだまだ分からないことも多いですが、新たな視点を与えてくれていることは間違いのないことです。

さて、分校としての最大の使命は、子どもたちに学習の場を確保し、学力をつけてもらい、進路を保証することではないかと考えます。少人数で生徒間のかかわりも制限される中で、基準をどこに設定し、授業をどのように仕組んでいけばよいのか、何度も迷いながら、これからも挑戦を続けていこうと思います。

最後に、親と教員が互いに批判し合う関係ならば、子どもをダメにするのは簡単なことだと言われます。だから今は、ちがう職種の大人たちが互いに尊重し合い、連携し、補い合って、子どもたちが迷わず、安心して挑戦できる温かい環境を提供できる一員でありたいと強く思います。

～保健体育教科担当　小別所　光～

春に赴任し、この一年で子どもたちと一緒になにができるのかを考えるとワクワクした気持ちでした。日々の学校生活、授業、運動とさまざまな場面で子どもたちと関わることができ、何事にも一生懸命に取り組む姿に感動しました。ときには同じ時間を過ごす仲間とぶつかったり、自分の将来が不安になったりと悩むこともあったと思います。いろいろな問題や課題と向き合うことで、子どもたちは大きく成長したと思います。

子どもたちと濃い時間を共にできたことを心からうれしく思っています。喜多原学園を出てからも「今の時間の続き」を生きる中で、ここでの生活で身についた力を存分に発揮してくれることを願っています。今後もさらに成長し、さまざまなことを感じる豊かな心を持った人になってほしいと思います。

米子市立福生東小学校いずみ分教室

～分教室担当　並里　育子～

私は児童自立支援施設での仕事が初めてで、戸惑うことの多い一年でした。また周りの先生方に感謝の気持ちでいっぱいの一年でもありました。

子どもたちはどこの学校も同じで、個性溢れる愛しい存在でしたが、日々の対応に困ることもありました。そんな時、教頭先生から「子どもたちの事は、寮の先生に聞くのがいい。」とアドバイスをもらい、寮の先生に相談しました。個々によって多少の対応は異なるものの、「口調や表情を変えて話を聞くモードをつくったり、ダメなものはダメだと伝えたりする。そして、児童自身が自分の口から前向きな言葉が出るようにもっていく。」などたくさん教えてもらうことができました。二十四時間体制で子どもたちと生活を共にし、一番近くで見ておられる寮の先生から教えてもらったことは、今も仕事をする上で心の支えになっています。

この一年間、いつも助けていただいた先生方、本当にありがとうございました。

令和三年度各寮紹介

～男子寮長　内藤和宏～

今年度の男子寮は、何年か振りに女性職員が配置されたことです。

職員自身も、男性職員では気付かない視点での助言を受けつつ、り児童の生活力向上を目指し、支援を向上していくような取り組みが増えていると感じています。

男子寮児童は、野球練習を中心に運動活動に取り組んでおり、野球を通じてあいさつやみんなで力を合わせて目標に向かって取り組む意識を高められるよう生活を送っています。

～女子寮長　尾澤　理子～

喜多原学園で子どもたちと共に生活をするようになり、今年で七年目になりました。

また、女子寮長という大役に任命され、試行錯誤し、時には涙も流し、それでも目の前にいる子どもたちとチームメンバーに支えられ、ここまでなんとか来れて今年で四年目になりました。

田中前園長が掲げられた理念である『自立し、社会と調和して生活する』という理念のもと、日々子どもたちと共に生活しているのですが、最近、もしかしたらこういう事なのかもしれないなと考える事がありました。

喜多原学園は、通勤交代制勤務の施設です。共に生活すると言っても、夫婦小舎制の施設職員の方のように、２４時間共に生活しているわけではありません。

しかし、どんな施設形態であっても、子どもたちは目的を持ち、成長する自分の姿を描き、入所してきます。その子どもたちに私は何が出来るのだろうと思った時に、行き詰まり感を感じた時期がありました。

その時、これもまた田中前園長が言われた言葉だったのですが、『自分の子どもでも安心して預けられる寮を目指して』と言われたのを思い出しました。

預かっている彼女たちの家族になれるわけではないけれども、預かっている彼女たちを大切に思う気持ち（私が親だったら我が子を大切に思って支援してくれる人に預けたいと思ったので・・・）、私の人生と彼女たちの人生が出会いから重なり、楽しい事や辛い事も共有しながら時間を共に過ごす、そのうえで、必要な場面で必要だと思う言葉をかける、我が子の子育てと何も変わらないのかもしれない、結構シンプルなものなのかもしれないと考えるようになりました。

７年目になると、最近は退所生と出会う事も増えてきました。退所生は決して平坦な道を歩んでいるわけではありませんが、それでも学園で過ごした日々を昔話として懐かしんで、近況を報告してくれます。

まだまだ、児童自立支援施設で子どもたちを支援するという事に対して、分かったというわけでは到底ありません。

それでも、目の前にいる子どもたちとチームメンバーとの時間を紡いでいく事が大切だという事は、退所生からも教えてもらっているので、変わらず試行錯誤だとは思いますが、頑張っていきたいと思っているところです。

令和三年度着任職員

～指導課係長　小谷　智志～

この度、皆成学園から喜多原学園の異動により、女子寮で勤務することになりました。十数年ぶりの学園の雰囲気は、どことなく変わらない古き良き伝統の中に、関係機関等から求められるニーズに対して、入所児童の自立に向けて、「子どもが自立し、社会と調和して生活することを支援する」という理念に基づき、変革しようという息吹を感じ取る事が出来ます。

学園で出会う子ども達は、昔も今も変わらず、これまで生きづらさを感じやすい社会で生活してきています。子ども達の自立に向けて、枠組みのある安定した生活の中で、自分を大切にしながら、健全な心身をはぐくみ、他者（社会）との協調（調和）をはかる力を育てる事が使命です。そのためには、日々の支援において、冷静で粘り強く、かつ不屈な愛情を注ぎ続けていきたいと思います。

～児童自立支援専門員　村上　悠果～

四月より、喜多原学園に着任し、女子寮の職員として働き始めました。大学では社会福祉について学び、特に児童分野に関心を持ち四年間通っておりました。

当たり前のことではありますが、座学と現場は全く異なるもので、毎日、今日はどんな日になるのか、自分には何ができるのかを考える日々です。不安に押しつぶされることが多い中でも、子どもたちが話しかけてくれた時、一緒に笑って楽しい時間を過ごせたとき、少し肩の力を抜くことができます。

子どもたちの発する言葉にハッと気づかされることもあり、一歩ずつではありますが、「信用できる、頼れる大人」になれるよう、精進しています。日々の生活を子どもたちに教えてもらいながら、子どもとの接し方を職員の皆さんの姿を見て、多くのことを吸収し、自分にできる、自分ならではの関わりや声掛けを一日も早く見つけていきたいです。

米子市立福生中学校いずみ分校

～教頭　稲村　徹～

この度いずみ分校に教頭として赴任してきました稲村徹です。前任校の箕蚊屋中学校でも毎日雄大な大山の姿を眺めていましたが、この春からは眺めるだけでなく、その自然の中で生活している素晴らしさを感じています。また、立場上部活動顧問ができなくなるところを、喜多原タイムや運動日課の中で、子どもたちと一緒に野球に取り組めている状況をうれしく思っています。これから学習や運動、日々の生活の中で子どもたちとともに成長していきたいと思います。よろしくお願いします。

～英語教科担当　尾崎　朱美～

この度の人事異動で福生中学校本校より参りました尾崎朱美です。いずみ分校では三年生を担任させていただきます。メロンパンと中島みゆきが大好きな自称ＥＴの英語教師です。分校に来て、大きな木々と雄大な大山に抱かれるロケーションでありながら実は、海が見えることに驚きました。近くにあっても見えないものが、ここ、いずみ分校に来るとよく見える―。子どもたちと共に自分も成長できるよう「至誠」をモットーに精進します。宜しくお願い致します。

～社会教科担当　星野　良仁～

令和三年四月より、いずみ分校の社会科の担当として着任しました神奈川県出身の星野良仁です。御縁があって、今回こちらに着任させて頂くことになりました。着任して、二ヶ月が経ちますが、この場所は自然に囲まれ、時間がとても穏やかに過ぎている感じが致します。

鳥取県の素晴らしいところを、見つけて生徒に伝えること。一日一日を大切に生徒一人一人と向き合うこと。この二点を特に自分は大切に教育活動を行っていきたいと思います。

～保健体育教科担当坪倉　龍太～

令和三年四月一日より福生中学校いずみ分校に着任致しました坪倉龍太です。

生まれた時から高校まで鳥取県で育ち、大学では岡山県に行き今年また鳥取県に帰ってきました。

小学校三年生～現在までずっとサッカーをやっており、今は主に指導者として活動しています。実際にスポーツをしたり、スポーツを観戦したりする事が大好きです。

着任して生徒、職員の方々、先生方、沢山の出会いがあります。これも何かの御縁だと思っています。この出会い、御縁を大切に先生一年目全力で努めてまいります。よろしくお願いします。

米子市立福生東小学校いずみ分教室

～分教室担当　奥田　孝道～

私が分教室に来て、二ケ月がたちました。一年前にも分教室にいたので、四月に喜多原学園に来たとき、とてもなつかしく思いました。自然に恵まれ、素晴らしい環境の中で過ごせることに、とてもうれしく思いました。

どうしたら子どもたちが「自立」・「社会と調和」していけるのかを考えつつ、他の職員と連携していきたいと思います。大人も子どももお互いがリスペクトし合える関係を築けるようにしたいと思います。

子どもと共に成長できるように努めていきますので、よろしくお願いします。

～分教室担当　須藤　文江～

喜多原学園に来て、早二ヶ月が過ぎました。児童と過ごす日々の中で、児童自身が本来持っている力をいかに発揮して「できた」「わかった」と実感できるような時間が随分多くなったように感じます。初めは上手くいかなかったけれど、教職員のみなさんや寮の先生方そして、学園に関わる方々がチームとして、児童をよい方向へと導いておられる姿を目の当たりにすることができました。私も微力ながら「チーム喜多原」の一員として、頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

喜多原写真館

田植え

デイキャンプ

大山登山

創立記念マラソン大会

競歩遠足

スキー・スノーボード体験

教職員の異動

学園職員

（令和３年３月３１日付）

転　任	児童自立支援専門員	田村　裕介（米子児童相談所）

（令和３年４月１日付）

着　任	係長（女子寮副寮長）	小谷　智志（皆成学園）
	児童自立支援専門員	村上　悠果（新規採用）

分校、分教室教員

（令和３年３月３１日付）

転　任	教頭	森脇　宏（米子市立福生中学校）
	教諭	勝部　幸治（米子市立加茂中学校）
	講師	角　誠（境港市立境港第二中学校）
	講師	小別所　光（西伯町立法勝寺中学校）
	講師	上杉　礼子（米子市立伯仙小学校）

（令和３年４月１日付）

着　任	教頭	稲村　徹（米子市日吉津村中学校組合立箕蚊屋中学校）
	教諭	尾崎　朱美（米子市立福生中学校）
	講師	星野　良仁（日南市立吾田中学校）
	講師	坪倉　龍太（新規採用）
	講師	須藤　文江（米子市立弓ヶ浜小学校）
	講師	奥田　孝道（琴浦町立船上小学校）

令和３年度　　喜多原学園年間行事

４月　　着任式　始業式　観桜会
５月
６月　　大山登山
７月　　プール開き　海水浴
**　　中国少年野球大会**
８月　　キャンプ
９月
１０月　　中国女子バレーボール大会
１１月　　秋の園遊会　創立記念マラソン大会
**　　中国駅伝・マラソン大会**
１２月　　クリスマス会、餅つき
１月　　とんど祭り
２月　　スキー・スノーボード体験
３月　　卒業式　離任式

※コロナ感染状況等で中止、変更の可能性あり。

児童在籍情報

	小学生		中学生		中卒生	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
R2　4月1日	3人	0人	5人	2人	0人	3人
R2　1月1日	6人	1人	7人	3人	0人	2人
R3　4月1日	3人	2人	5人	1人	0人	1人

後援会報告

１、令和２年度事業報告

２、令和２年度収入支出決算報告

３、会計監査報告

４、令和３年年度事業計画（案）

５、令和３年度収入支出（案）

６、役員の承認について

７、その他

令和２年度歳入歳出決算		令和３年歳入歳出予算	
収支決算額	２６８，３３５円	収支予算額	３００，０００円
支出決算額	２６７，０２１円	支出予算額	３００，０００円
繰越額	１，３１４円		

【後援会役員】※敬称略・順不同

会長	赤沢　亮正	委員	関山　公郎	委員	保坂　葉子
副会長	上森　英史、本田　修	委員	山舩　茂樹	委員	加川　綾子
事務局長	馬詰　俊哉	委員	長尾　　修		
監事	中川　正純	委員	藤原　敏朗		
監事	松永　芳久	委員	大鶴　憲司		

会員数　６９名（R３，４，１現在）

御寄付ありがとうございました。※敬称略・順不同

・（株）備中屋本店　　代表取締役　上森　英史　　・馬詰　俊哉（喜多原学園元園長）

編集発行

鳥取県立喜多原学園

鳥取県米子市泉７０６

TEL　0859－27－1101

FAX　0859－27－1611

編集後記

喜多原だよりNo.７３、７４合併号を作成させていただきました。昨年度はコロナ渦で、予定していた行事や外部交流が少なくなってしまいました。今回合併号にしたのは、地域交流が限られた中で、年複数発行することにより早く当学園の活動内容を皆様に伝えることができるようにと思ってのことです。

日頃お世話になっている地域の皆様、学校の先生方、関係者の皆様に、学園職員一同、深く感謝申し上げます。今後とも御支援、御協力いただきますようよろしくお願いいたします。